

(大島郡伊仙町木之香)

位置と環境

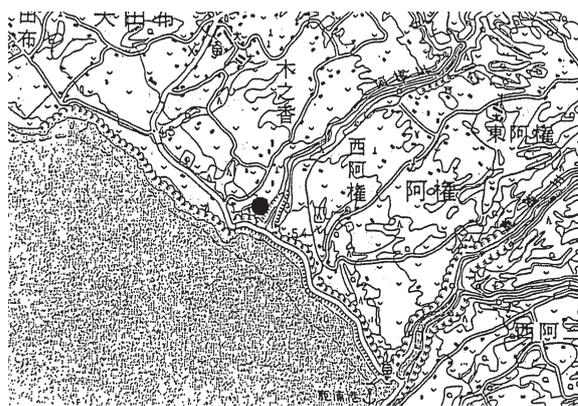
天城遺跡は鹿児島市から南へ533kmの地点の徳之島の南部を占める伊仙町に所在する。伊仙町の南西部木之香の、南西に東シナ海を望む隆起した琉球石灰岩の尾根状の台地の先端部分に立地する。遺跡の南側と西側は断崖となっており、標高47m～48mである。阿権川の河口部の右岸直上である。

調査の経緯

1993年10月から11月にかけて、県営畑地帯総合土地改良事業（木之香地区）に係る埋蔵文化財の確認調査で確認された。調査は、伊仙町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力で実施した。確認調査は14か所に2m幅で長さ4～10mのトレンチを設定し掘り下げた。確認調査の面積は160㎡である。ほとんどのトレンチは個人の「天地返し」といわれる畑地造成で攪乱されていたが、台地の先端部の2トレンチからチャート製の石器等が出土した。当初、黒褐色の2層から須恵器と古墳時代相当の兼久式土器と縄文時代後期の嘉徳Ib式土器と、チャートの剥片などが出土した。時期が混在し土層状態もしまりがなく、この時点で2次堆積と判断した。ただし天地返しなどの最近の攪乱とは明らかに異なるものである。2次堆積と判断した後、遺物の取り上げを行い、岩盤まで完掘することとして掘り下げを行った。この後も粘質の強い暗赤褐色粘土層から下の石灰岩直上の粘土層からもチャートのチップが出土している。掘りあげられた後で石器・石核などの存在に気が付く状況であった。

遺物（石器）について

南島においては、隆起珊瑚礁を基盤とするため、一般に土壌が薄く、一部を除いて火山灰などの地層を手がかりとして時期を判定することが難しい。出土石器については、台形石器8（1～8）・抉入石器3（9～12）・搔器2（13・14）・石核2（15・26）・2次加工のある剥片3（16～19）・先端加工石器1（23）・彫器（25）の可能性のあるもの1・その他剥片・碎片等に分類し、以下の点から旧石器時代の石



第1図 天城遺跡の位置

器と判断されている。

①天城遺跡出土土器の縄文時代後期や晩期の時期の石器には、通常石斧・磨石・敲石を伴い、数は少ないが石鏃や搔器や楔形石器を器種としてもつ。天城遺跡出土の石器には、これらが全くみられない。また縄文時代前期や中期の資料と比較しても、同様である。今日まで縄文時代の遺跡では、みられない器種に分類できる。

②石器組成が縄文時代の遺跡にはみられない。

③チャートを用いた石器の出土した遺跡は、奄美大島名瀬市朝仁天川遺跡・笠利町ケジI遺跡・同下山田遺跡・龍郷町ウフタ遺跡・徳之島伊仙町犬田布遺跡などで出土しているが、石核や剥片の形状等から、明らかに異なる剥片剥離技術が予想される。不定形の剥片を用い、折断を行い、折断面をそのまま残し、もう片方にブランディングが施される台形石器と、チョッピング・ツール状の石核、平坦剥離があまり見られない等の技術的特徴を有する。

④こうした点から、旧石器時代の日本列島の石器と比較して、石器の型式学的な見方からは、AT（始良カルデラ火山灰）以下の石器の可能性が強い。つまり2.4万年前より古い可能性が強い。

特徴

南島における旧石器時代研究は、沖縄県那覇市山下洞穴や同具志頭村港川遺跡の化石人骨の発見から、それ以後明確な遺物・遺構が検出されないことで、長く停滞していた。近年、笠利町土浜ヤヤー遺跡での磨製石器の出土（1988年報告）や、同喜子川遺跡のAT以下の礫群の発見（調査は1987年から継続し

ている)と剥片の出土,南種子町横峯遺跡の3万年前を越える礫群の検出(1993年報告)等新たな局面を迎えようとしていた。徳之島で旧石器時代の石器が出土したことは,これら結び付いて,南島に旧石器文化が存在したことをしめし,旧石器時代文化の大陸と日本本土を結ぶ経路が浮かび上がる画期的な発見である。

資料の所在

出土遺物は,伊仙町歴史民俗資料館に保管されている。

参考文献

伊仙町教育委員会1994「天城遺跡・下島権遺跡」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』9

(堂込秀人)



第2図 出土石器